

日本語版への序文

国際労働者協会（第一インターナショナル）が一八七二年に分裂したとき、その組織の姿は創立当時とはすっかり変わっていた。改良主義者が組織の大部分を構成することはなくなり、むしろ反資本主義が国際労働者協会全体の政治路線となっていた（ミハイル・バクーニンが率いたアナキストのような、後期に形成された諸潮流をも含めて）。もっと広い目で見ても、大きな変化が起きていた。一八七一年のドイツ統一は、新しい時代の到来を告げていた——イタリアの統一や日本の明治維新もその証拠といえる——そこでは国民国家が政治的・法的・領土的な統一性の中心のなかたちになろうとしたのである。しかしこのことは、政治的な指導権の大部分を放棄するよう協会員に求める超国家的な組織のあり方に疑問符を付けたのだった。

その後の数十年間に、労働運動は一貫した社会主義の綱領を採用し、ヨーロッパ全域に、さらには世界の他の地域にも広がった。そして国家の枠組みを超える新たな調整機構を構築したのである。名称がつながっているだけでなく（カール・カウツキーの第二インターナショナル、一八八九〜一九一六年。ウラジミール・レーニンの第三インターナショナル、一九一九〜一九四三年。ドイツ連邦共和国〔西ドイツ〕首相ザイ

リー・ブランドの社会主義インターナショナル、一九五一年（現在）、さまざまな「インターナショナル」の社会主義的政治が——その参照の仕方は大きく異なっていたけれども——第一インターナショナルの遺産を参照していた。こうして、その革命的なメッセージはとてつもなく豊穡なものとなり、それが存在していた間に達成された成果よりもはるかに大きな成果を、長い時を経て生み出していったのである。インターナショナルは、労働の解放が一国では勝ち取ることのできない、グローバルな目標であることを労働者に理解させた。また、労働者は他の勢力に自分たちの声を代弁してもらうのではなく、自分たちの組織力を通じて、自分たち自身で目標を達成しなければならぬこと——そしてこの点はマルクスの理論的な貢献に依拠するものであるが——資本主義体制そのものの限界を克服することこそが肝心なのであり、資本主義の枠内での改良は、もちろんそのものとして追求すべきであるとはいえ、搾取と社会的不正をなくすることはできないことを、仲間たちの間に広く認識させたのである。

過去二五年あまりの間に、政治と経済の大きな変化が次々に起こってきた。ソヴェト連邦圏の崩壊。環境問題の浮上。グローバリゼーションによる社会変化。そして国際労働機関（ILO）の統計は、失業者の数が二億人以上のものになったことを示しているが、これは資本主義史上最大規模の経済危機の一つであるといえよう。そのうえ、労働市場「改革」（この言葉は時代とともに、本来の進歩的な意味を失ってきている）が実施されたところでは、年々より「柔軟」に、労働者を解雇しやすくしてきたといえる。だが、それによって雇用が改善されるどころか、むしろより深刻な不平等を引き起こしているのである。多くのヨーロッパ諸国が憂慮すべき失業率を示している現状は、この「改

革」の失敗の典型例である。

それにもかかわらず、近年、世界の至る所で活発になっているグローバルな抗議運動は、これまでのところ、雇用の世界に生じた新しい問題や急速な変化について十分考えることなく、単に社会的な平等を要求するという非常に一般的な特徴を有している点に、その運動の特色が現れている。実際、少し前の時期には、多くの論者が「雇用の終焉」が近いとの見方を提示していた。このように、二〇世紀を通じて主役を演じてきた労働が次第に弱々しい脇役になり、雇用が保障されず権利もじわじわと剝奪されていく、これまでにない柔軟な労働市場のもとで、労働組合は、若年労働者や移民労働者を代表し組織することがより困難になってきている。

しかし、もし資本主義的なグローバル化が労働運動の力を弱めるのだとしても、それはまた多くの点で、コミュニケーション手段の増大を通じて、労働者の国際的な協力と連帯を促進しうる新しい道を切り開いてきたともいえる。近年の資本主義の危機にともなう——それはこれまで以上に資本と労働の分断を深めている——一八六四年にロンドンで創立された組織の政治的な遺産は再び説得力を取り戻し、その教訓は今日これまでにないほど時宜を得たものとなっている。

この資料集は国際労働者協会の創立一五〇周年（一八六四〜二〇一四年）を記念して企画され、三か国語で同時に出版された。英語版の *Workers Unite! The International 150 Years Later* (London/New York: Bloomsbury, 2014, 312 + XVIII pages) はハードカバーとソフトカバーの両方で出版され、合わせて

一五〇〇部が刷られた。そして世界中の人々が自由に利用できるように、英語版の出版社はオンライン・オープン・アクセスで利用できる電子版のテキストに本書を加えたのである²⁰。イタリア語版は *Lavoratori di tutto il mondo, univivi!* (Rome: Donzelli, 2014, 256 + XVI pages) と題され、二五〇〇部が出版された。ポルトガル語版は四〇〇〇部、タイトルは *Trabalhadores, uni-vos! Antologia politica da I Internacional* (Sao Paulo: Boitempo, 2014, 334 pages) である。これら三つの版は多くの好意的な書評を引き出し——それらは一流の国際紙や学術誌に掲載された——目覚ましい商業的な成功を収めたのである。

この資料集に対する新たな関心の波が二〇二二年にやってきた。この年に本書はスペイン語に訳され、*Trabajadores del mundo, unios! Antología política de la Primera Internacional* (Manresa: Belaterra, 2022, 390 pages) というタイトルで一〇〇〇〇部が刷られた。波はフランス語版にも届き、*Pour lire la Première Internationale* (Paris: Les Éditions sociales, 2022, 408 pages) は二〇〇〇部となった。

これらの完訳に加えて、本書「序論」の要約版が学術論文として一五か国語で掲載された。最後に「序論」の全文がインドで三つの言語に訳された。一つめはタミル語訳 *Sarvathesa Thozhilalar Sangathin Varalarum Marabum*, Chennai: New Century Book House Private Limited, 2015 (167 + XX pages)。二つめはテルグ語訳 *Modai International: Charitraka Sameeksha*, Vijayawada: Sameeksha Publications, 2016 (104 pages)。三つ目、三つめはコンブイー語訳 *Pratham International ki Kahani*, New Delhi: Akar, 2017 (122 pages) である²¹。

このたびの目を見ることになった日本語版は、本書の長い翻訳シリーズを引き継ぐものである。

初版から九年、日本の読者に届けられるこの本はすでに国際的に大きな成功を収め、今後は中国語その他の言語での出版も予定されている。

本書は、これまで日本語では利用できなかった多くの資料を収録した最初の資料集となる。本書に収録された八〇点の決議と発言録のうち四九点（ただし訳者が確認したかぎり）は今回初の邦訳となる。私のねらいは、新しい世代の日本の読者に、国際労働者協会の歴史、その主要な思想や業績について、より完全なカタチで理解する新たな方法を提供することにある。

マルチエロ・ムスト

トロント、二〇二三年八月

[1] 代表的な著作に、ジェレミー・リフキン著『大失業時代』（阪急コミュニケーションズ、一九九六年）がある。

[2] <https://www.bloomshurycollections.com> に収録されている。